

# 伝承会報

第五号 平成二十四年二月十九日発行

編集発行 鈴木伸昌

今回の伝承会報は、河野百鍊先生の「号」や家紋についての考察と、生誕碑並びに、墓地内にあります顕彰碑の碑文の紹介等でございます。

## 目次

- 一・河野百鍊先生の号  
「百鍊」「天劍」「虚空軒」「虚舟軒」について
  - 二・生誕碑 大分県河野家に建立された碑文 全内容について
  - 三・顕彰碑 大阪府四天王寺に建立された碑文 全内容について
  - 四・家紋「隅切り角にユリニツ木」について
- 一・河野先生の号である「百鍊」「天劍」「虚空軒」「虚舟軒」「百鍊」について

河野先生と御昵懇であった元航空自衛隊空将補・海老根達先生が、全日本真剣道連盟発会式のご挨拶の中で語られたお話では、この「百鍊」とは、幕末期、水戸藩主 徳川斉昭公に仕えた儒学者 藤田東湖が

詠んだ漢詩「正氣歌」から取ったとのことですが。但し、それが海老根先生の推測か、河野先生から伺った話なのかは不明であります。

この漢詩が詠まれたのは主君 斉昭公がお上より謹慎処分を受け、藤田東湖自身も同時に蟄居幽閉をやむなくされた時期にあたります。南宋末期、支那の志士 文天祥の詠める「正氣歌」に寄せて藤田公が詠んだ同銘の漢詩「正氣歌」の一詩に「百鍊」という言葉が認められ、次のようになります。

「凝為百鍊鉄鋭利可断鏖」

この漢詩の意味は、「天地正大の気が凝りては刀となり、その鋭利なること兜をも断つ。」ということ、つまり詩に認められた「百鍊」とは、日本刀のことを表しております。（河野先生の蔵書の中に「正氣歌」「正氣歌講義」がございました。）

尚、藤田公の「正氣歌」全容につきましては八神邦武氏による現代語訳では次のようになります。参考までに掲載致します。

『天地に満ちる正大の気は、粹を凝らして神州日本に集まり満ちている。』

正気、地に秀でては富士の峰となり、高く大いに幾千年もそびえ立ち、流れては大海原の水となり、あふれて日本の大八洲をめぐる。

開けば、幾万もの枝に咲く桜の花となり、ほかの草木の及ぶところではない。

正気、凝れば、百度（ひやくたび）鍛えし日本刀となり、切れ味鋭く兜を断つ。

忠臣いずれもみな勇士。武士ことごとく良き仲間。

神州日本に君臨されるはどなたか。太古のときより天皇を仰ぐ。

天子の御稜威（みいつ）は、東西南北天地すべてにあまなく広がり、

その明らかなる御徳は太陽に等しい。

世の中に栄枯盛衰の絶えることはない。時に正気が光り輝く。

たとえば、欽明帝の御代のこと。物部尾輿（もののべのおこし）、中臣鎌子、大連（おおむらじ）の議にて、剛直なる正論をもって、蘇我稲目（そがのいなめ）の惑える仏教を排斥した。すなわち、英明なる帝の叡慮を助け、蘇我の仏像、海に捨て、私寺ごとく焔をあげて焼きつくした。

たとえば、中臣鎌足、正気をおこなう。「乙巳（いつし）の変」（大化の改新）。蘇我氏の専横、倒して皇室国家を磐石安泰ならしめた。たとえば、和氣清麻呂、正気をおこなう。宇佐八幡の御神託をいただいて、妖僧「弓削道鏡」、肝を冷やした。

同じく、北条時宗。建治元年（1275年）、降服迫る「元」の使節を虜にし、相模の国は竜の口にて切り捨てて、捕虜の首と胴を泣き別れにした。

同じく、元寇襲来するとき、正気は玄界灘の猛風を起こし、怒涛とともに外国軍の異様な気配を滅ぼしつくした。

後醍醐帝の御代のこと。元弘の変（1331年）。倒幕の企て洩れて、志賀の比叡山に逃れた夜は明るい月夜。さらに藤原師賢（もろかた）ら、帝の御衣（みけし）を借り、帝の乗り物にて行幸を偽り、延暦寺へ。帝はその間に笠置の山へ移りたもう。

南朝は吉野城の戦いたけなわなるとき、元弘三年（1333年）、護良（もりなが）親王の忠臣、村上彦四郎義光（よしてる）、正気を行う。帝子（大塔宮・護良親王）の身代わりに、落城さな宮の鎧兜をいただき切腹す。

あるいは、建武新政、護良親王、正気を行う。足利尊氏の誅殺くわ

だて、鎌倉は東光寺の土牢に幽閉さる。深い憂憤、苦悩のうちに弑殺さる。時に二十八歳。

あるいは、楠木正成、正行（まさつら・十一歳）父子の桜井の駅の別れるとき。正成四十三歳、正気を行う。生き延びて最期の一人になるとも帝を護れ、と遺言するは、なんとねんごろなことが。勝てぬ戦と知りながら、大楠公、湊川にて討ち死にす。

あるいは、天正十年春三月、織田信長に敗れた武田勝頼、天目山にこもりいる。讒言にて幽閉されていた小宮山内膳正友信、主君の恩を忘れず、これが最期のお供だと、駆けつけ許され殉死した。

あるいは、天下分け目の関が原、徳川家康が股肱の臣、鳥居彦右衛門元忠、主君の囷を買って出て伏見の城を守り奮戦。二千の手勢とわが身をもって、四万の敵に当たって討ち死にする。享年三十三歳。

以来、太平の世は二百年。かくのごとく正気は、常に伸びるを得てきた。

しかし、正気は、その鬱屈するときもあつたが、赤穂義士の四十七人を生み出す。

すなわち、当時を知る人々が亡くなっても、英霊たちが滅んだことは、いまだかつてない。

正気、とこしえに天地の間にあつて、りりしく普遍の道を現し続ける。

かくのごとき正気を、だれが助けて伸ばせるだろうか。人為でできることではない。

抜きん出て立つ東海の日本の浜辺、忠誠つくして皇室を尊び、両親を敬うがごとくに、天津神につかえまつる。

学問を修め、さらに武道をきわめ、誓って異国のけがれを払わんと欲

す。

ある日、時運、困難となり、水戸藩主・徳川斉昭の身は隠居謹慎を命ぜられて表より消え、幕府は時機を見るに頑迷にして愚鈍。藩主の冤罪は、一人残された腹心・東湖に及んで蟄居幽閉の身となった。東湖、鳶葛(つたかずら)のつるにからまれたごとく苦しみ身動きが取れない。藩主の冤罪、誰に向かつて陳述できようか。わが身は、江戸の水戸藩下屋敷にあり、先祖の墓のある郷里からも遠ざかっている。

どうやって亡父亡母のご恩に報いることができようか。いつしか二年の時が過ぎ、幽閉の身に、ただこの正気のみが満ちている。

ああ、わが身は、たとえ死を免れぬとしても、どうして正気よ、おまえと離れることを忍べようか。わが命の絶えるも伸びるも天地の神におまかせする。生きようと死のうと、疑うことなどできようか。生きるならば、まさに主君の冤罪を晴らし、主君のふたたび表舞台で国の秩序を伸張する姿を見るにちがいない。

死しては、忠義の鬼と化し、天地のある限り、天皇の御統治をお護り申し上げよう。

### 「天剣」について

海老根達先生のお話

「河野先生の「天剣」という号は、武道の考え方で、下の位は人を斬る。中の位は人を治める。天の位は天下を治めるもの。即ち王者の剣です。最初は細かい技術から入って、最後は王者の剣に到達するものになる。そういうところからとられた。」とのことでした。

この解釈が海老根先生の推測か、河野先生から伺った話なのかは

不明であります。

萩野保正先生に伺った話

「天剣」という言葉は禅語から取ったのではないかとのことでした。その禅語とは

「両頭俱截断 一剣倚天寒」、「リヨウトウ トモニ セツダンシテ イツケンテンニヨツテサマジ」と読みます。

この禅語の意味につきましては、河野大通著「床の間の禅語 続」では、次のように解説されております。

『迷いも切り捨て、悟りも切り捨て、両方とも一緒に切り捨ててしまつて、一振りの剣だけがキラキラと、寒々と天に輝いている。』

そういう無心な心境だけが、たった一つある。それだけなのです。浅学な小生としては、この解説を踏まえ再考してみましたものの、この禅語の意味と河野先生の号に係性が見つけられず、よくわからないというのが正直なところでございます。

これらの関係性または「この禅語はこう読むのだ」といった禅語の意味するところ、または「天剣」の意図するところをご存知の方がいらつしやいましたら、ご教示いただければ幸甚に存じます。

### 「虚空軒」「虚舟軒」について

河野先生はあらゆるもの…机を始め、鍋に至る様々な物にご自身のお名前を書いたり刻んだりされた方と聞き及んでおりますが、

その河野先生の蔵書の中に「虚舟軒」と揮毫されたものがございます。まず号の一部である「軒」という言葉の使い方につきましては、わかりやすい例えですと、中華料理屋の店の名前などでよく見受けられますが、日本古来の事柄でも使われていることがあるようです。

その一例として虚無僧寺を挙げますと、虚無僧寺に「軒」という呼び方をするものが多く見受けられます。さらに実例を挙げますと、江戸時代、仙台には布袋「軒」、相馬には喜染「軒」、山形には臥龍「軒」がありました。

なお、「虚空」という言葉につきましては、引き続き虚無僧の世界の例で考察いたしますと、虚無僧の吹く尺八は(仏法器とも言われ、尺八吹奏は別名吹禅、お経を詠むことと同義とされております。その虚無僧の吹く普化宗尺八曲の根源の曲と言われているものに「虚空」という曲がございます。しかし、河野先生が尺八を嗜まれていたか等については確認が取れませんでした。もともと、尺八とは無関係に「虚空」という言葉に特別の思いを託されたことだったのかも知れませんが、日本古来の事柄については諸々の事柄を成り立たせる要素が数限りない繋がりを持ち存在しうるからであります。

河野先生がなぜ「虚空軒」あるいは「虚舟軒」という号を使われておられたのか、またこれらの号の意味するところは如何様なものであったのか。どなたかご存知の方がいらっしゃいましたら、ご教示いただければ幸甚に存じます。

## 二・河野先生の生誕地である大分県日田市天瀬町の河野家の庭に建立されている生誕碑

河野先生の生誕の地である大分県日田市天ヶ瀬町杉河内には、現在河野先生の御舎弟の御息が住まわれておりますが、その敷地の一角に河野先生の生誕碑がございます。碑文については、印刷したものが残っておりますが、実際の生誕碑に刻まれた文と異なる点がございませぬので、生誕碑に刻まれております文をご紹介します。

### 『無雙直伝英信流第二十代宗家名人位 河野百錬先生誕生之碑銘文

恩師、河野稔先生、号ヲ百錬ト称シ、明治三十一年二月十九日父徳市母みよノ長男トシテ山紫水明ノ此ノ地ニ出征ス  
幼少ヨリ武道ヲ好ミ、十五歳ニシテ剣道ニ志ス。

昭和二年始メテ大日本居合兵法無雙直伝英信流ニ入門、土佐国正統第十八代穂岐山波雄先生、第十九代福井春政先生ノ両宗家ニ師事シ、研鑽久シクシテ其ノ奥義ヲ極ム。

戦時中八大陸各地ニ武道奉公ノ行御ヲ試シ、昭和二十五年四月十五日、数アル門人中選ハレテ、同流第二十代宗家ヲ紹統シ、摂州住吉大社御神前ニ於テ正流正統ヲ継承ス。

其後不世出ノ天資ヲ以テ、各流派ヲ統合シ、新タニ全日本居合道連盟ヲ結成シ、内閣総理大臣池田勇人先生ヲ会長ニ仰ギ、ソノ理事長トシテ連盟ノ運営指導ニ当ル。

現在大日本武徳会剣道範士九段、居合道範士十段ヲ保有シ、卓越セル剣風ト、高邁ナル識見ハ現代日本居合道界ノ第一人者タルニ相応シク、斯道ノ師表トシテ景仰サレ、先年ソノ功績ニ依リ、斯界最高ノ榮譽タル「第三世名人位」ヲ贈ラレ、一族其ノ光栄ニ感激シ相詢リテ、名人生誕ノ碑ノ建立ヲ発願セル。

顧ミレバ、菊水ノ流レハ、筑後川ト共ニ絶エズ、日本武士道精華ハ先生ニヨツテ復活サレタモノト云ウベク、今日此ノ名人位ヲ機トシテ、更ニ千秋滅セズ、燦然トシテ萬古ニ光ヲ放ツ、真剣道ノ鑑トナラレンコトヲ記念シテヤマサルナリ。

昭和四十年甲辰八月吉日

佐賀国剣士 居合道教士八段 畑島正撰

出羽林崎住 岩崎潮風 読み取れず

安達恒雄 謹刻

昭和四十年五月吉日建立

河野正生

勇

萩原利夫

### 三、河野先生のお墓に建てられている顕彰碑

河野先生のお墓は、大阪府 四天王寺境内にございまして、そのお墓の一角に顕彰碑が建てられています。碑文は門弟である田辺一先生の撰によるもので、碑文の揮毫につきましてはどなたによるものかは今のところ不明であります。どなたかご存知の方がいらつしやいましたらご教示いただければ幸甚に存じます。

顕彰碑の全文は次のようになります。

『河野稔先生八無雙直傳英信流正統第二十代宗家ニシテ號ヲ天劍百鍊ト稱ス。九州日田杉河内ニ生レ阪府ニ住ス。居合兵法近世ノ名人ニシテ其奥妙極意ノ理業八將ニ眞剣道ノ聖父タリ。日常書明ラカニシテ和ヲ貴ミ 其座右ノ銘トシテ絶妙剣風存唯一心トアリ。享年七十七歳。其剣光ヲ仰キタル門下生万余ノ衆望ヲ得テ茲ニ眠ル』

昭和五十一年四月吉日 無雙直傳英信流居合兵法指導会本部

### 四、家紋「隅切り角にユリ三ツ木」について

河野先生の眠る四天王寺は推古天皇元年(五九三年)に聖徳太子により創建された官寺であり、まさに時代の波と人々の営みと共に続いて

まいりました。(河野先生が居合と出会われたのは四天王寺武徳殿です。)

歴史的人物との関わりも深く、時宗の開祖 踊り念仏で有名な一遍上人も訪れております。

この一遍上人、実は鎌倉中期の瀬戸内海で勇名をさせた伊予の河野水軍の末裔であります。河野先生もまたその末裔であるのではないかと推測しております。(先生ご自身、そのような発言があったと仄聞いたしており、また蔵書の中に「河野一族」がございました。)

理由は苗字と家紋でありまして、河野水軍の河野氏の家紋が「隅切り角に三文字」であるのに対し、河野水軍の守り神が祀られている大山祇神社(伊予、今の愛媛県今治市)および河野先生の家紋は「隅切り角にユリ三ツ木」であります。家紋の形状が「三文字」と「ユリ三ツ木」と似ております。

栄華を誇った河野氏は、天正十三年の豊臣秀吉の四国征伐により伊予から追われ安芸竹原に移り、遂に断絶に至ったという通説があります。

「家」を第一義と考えた古人のことゆえ、一族の命脈を保つ為に、河野氏の係累の方たちが、家紋の三文字をユリ三ツ木に変え、名字の詠み方を変えて(河野先生は、「ここの」と読みますが、郷里大分では「かわの」と読むそうです。)難を逃れ世を忍んだのではないかと、その中に大分の山中深くに身を落とした者もいたのではないかと、そんなことを考えてしまいます。

これらの事につきましても、ご存知の方がいらつしやいましたら、ご教示いただければ幸甚に存じます。